

きしだ みつお

1、プロフィール

劇作家、評論家。職業人としての傍ら 1961 年以降、作家活動に入る。作品は中央誌などにも掲載され好評を博し、更に演出家としても活動した。1980 年以降は主に評伝に着手。

<生没>

1932(昭和7)年2月28日～2019(令和元)年8月3日

<代表作>

『民次郎一揆』(戯曲)

『評伝 大塚甲山』(評論)

<青森との関わり>

青森市に生まれ、職場もこの地であり、文化の担い手として定着、活動の場となった。

2、作家解説

本名 小倉三生。1932年2月28日、青森市に生まれる。東北大学経済学部卒業。

1954年、青森銀行入行、1990年退職。

1961年以降劇作と評論活動に入る。1961年処女作としての戯曲「製材のうた」が演劇月刊誌「テアトロ」1962年4月号に掲載される。以後は年ごとの連作となり、青森銀行演劇部による公演など演出も兼ねて行われた。

1968年には登場人物延べ130名余りに及ぶ三幕物「民次郎一揆」を書き、青森職場演劇サークル協議会合同公演として行われ、演出もした。以後は劇作が主となり、上演は青森、東京、大阪、神戸などで行われ、委ねる形をとった。

1973年には「青春のうた」、1976年、出稼ぎ留守家族の悲惨さを追究した「吹雪のうた」1978年「北のうた」、1981年「1人の教師と14人のエリートたち」を書く。

1983年には「民次郎一揆」を全面改稿、それは青森市の劇団支木によって上演され、すぐれた舞台劇として仕上げられた。

戯曲集『民次郎一揆』（北の街社、1996年）には表題作のほか「北のうた」「1人の教師と14人のエリートたち」を収録。

戯曲集『吹雪のうた』（青森県文芸協会出版部、2002年）には表題作のほか「青春のうた」「馬喰のうた」「夜明けのうた」「土のうた」を収録している。

評論については1980年5月、評伝「津軽とほんまよしみの世界」を「東奥日報」に全6回連載、1984年10月「評伝青山哀囚」を同紙に全5回連載、翌1985年11月同紙に「大塚甲山評伝／暁は再び来(きた)るなり」を全20回にわたり連載した。明治期の詩人大塚甲山の基本像を初めて解明、この連載をベースにして5年後『評伝 大塚甲山』（未来社、1990年12月）を著した。

1997年から2003年にかけて初期社会主義研究会編・発行の年刊誌「初期社会主義研究」に「詩人大塚甲山研究」などの論考あわせて6篇を順次に発表。

1999年から2005年にかけて青森県旧上北町（現東北町）直営の大塚甲山遺稿集編纂刊行事業に編纂委員を委嘱されて参加、従事した。

2005年3月、当該『大塚甲山遺稿集』は全7巻で完結した。

3、資料紹介

○『民次郎一揆 きしだみつお戯曲集』

図書

1996(平成8)年10月8日

194mm×133mm

1813年の秋、農民男女数千人が蜂起、弘前城に迫ったという津軽最大の百姓一揆が舞台。若き庄屋民次郎が進行する一揆という壮大な人間ドラマのなかで先達や農民に教えられて熱く呼応、指導者として自己実現を果すまでを描く。

○『評伝 大塚甲山』

図書

1990(平成2)年12月1日

190mm × 132mm

青森県旧上北町の生んだ明治期の詩人であり、俳人でもあった大塚甲山の初の本格評伝。森鷗外、坪内逍遙、内藤鳴雪らに認められた卓抜した才能でありながら貧窮のうちに夭折。その悲運の生涯と時代の不条理に屈しなかった詩精神の軌跡に初めて光を当てた。